『ルーシをめぐりて』の世界

（自伝的主人公の問題 Ⅱ）

松 本 忠 司

1912年4月2日（新暦15日），パリでおこなわれた，亡命ロシヤ人たちによるゲルツェン生誕百年記念集会において，マクシム・ゴーリキイは未発表の新作短編小説『人間の誕生』を朗読した。カフカースの壮麗な自然の中で生まれ出た新しい生命への讃歌であり，「ロシヤの地の新しい住民，未知の運命をになった人間」[(1)]の，その創造的可能性によせる期待にみたされた短編は，会場を埋めつくす参会者たちを深い感動のうちにつつみこんだ。「至高の使命——それは地上において人間であることだ」という，力づよい，誇り高い宣言がひびきわたるこの作品は，のちに連作『ルーシをめぐりて』の中にまとめられた，29編の短編小説[(2)]の開巻をなすものであり，同時に，連作全体にとって綱領的意義をもつ。それは1910年代，とくに1917年の社会主義大革命の準備期におけるゴーリキイの作家的姿勢を明確に示すものであっ

---

(1) М. Горький, Собрание сочинений в 30-и томах, Гослитиздат, М., 1948～1955, т. 11, с. 17.

(2) «По Руси» の29編の短編は，ゴーリキイによって1912年から1917年にわたって書かれたもので，最初，個別的に，各種雑誌や単行本に発表された。そのさい，多くの短編に，«Из воспоминаний проходящего», «Из впечатлений проходящего», «Очерк», «Воспоминания» などの副題が付せられた。1913年，『流氷』，『女』，『故人』など9編が «Записки проходящего. 1～2» «изд. И. П. Ладыжникова, Берлин» にまとめられ，さらに1915年には『人間の誕生』から『故人』までの11編が «По Руси» の共通表題のもとに，«Жизнь и знание» 版著作集19巻に収められた。残りの18編は1918年に «Ералаш и другие рассказы», (изд. «Парус», Пгр.) の表題で単行出版された。1923年，«Книга» 版著作集のために，ゴーリキイは初めてこの29編を «По руси» としてまとめた。本稿では注(1)のテキストに拠った。引用文の末尾に当該ページを指摘した。

た。

1905年の革命の敗北後，ロシヤは，いわゆる《反動の時代》の恐怖の底に沈んでいた。革命における積極的活動家の多くが，絞首台に，牢獄に，流刑地に送られ，あるいは異境での亡命生活を余儀なくされていた。ストルイピンの鉄の弾圧のもとに，反体制運動のいっさいの試みが萠芽のうちに踏みつぶされたかに見えた。昨日は革命的ヒロイズムに酔った急進派知識人の多くが，今は絶望的気分に沈んで，理想を放棄し，専制の旗下にくだり，あるいは個人の殻に閉じこもった。時代精神の衰退はロシヤ文学の上に濃厚に影をおとし，厭世主義的気分が文壇を支配していた。かつては《革命の海燕》の作家ゴーリキイのまわりに結集した民主主義的な，リアリスト作家集団も，この時代には，反動の奔流に押し流されて，変質と解体の運命に遭遇していた。リアリズムの低下にかわって，虚無的個人主義，病的神秘主義，デカダンと動物的本能主義が文学界を席捲し，レオニード・アンドレーエフとアルツィバーシェフが読書界を魅了していた。

しかし，反動が勝利を謳歌する，ほかならぬこの時代，非妥協的論争の中からレーニンの党建設が進められ，解放運動の中核が人民自身の内部において形成されていった。

1912年4月にレナ鉱山における労働者射殺事件が起こると，ロシヤの労働者階級は，大規模なデモ，スト，集会によって起ち上がり，抗議の波はメーデーのゼネストへと高まっていった。この年の8月，レーニンはカプリ島に滞在していたゴーリキイにあてた書簡の中に，こう指摘した，――「ロシヤでは，革命的高揚が起こっています。ほかならぬ，まさに革命的な高揚が。」(3)（傍点原著者，原文斜体）それは，レーニンが規定したように，「雄壮な，爽快な，力づよい，大衆自身による運動」であり，「人工的な，書斎の中で作り上げられた処方箋を無用のボロ屑のごとく掃き捨てて，前へ，たえず前

(3) «В. И. Ленин и А. М. Горький», изд. «Наука», М., 1969, с. 85.

へと，進んでゆく[1]」全ロシヤ的高揚を意味するものであった。ツァーリズムには，この高揚を自力で阻止する可能性はなかった。1914年の夏に勃発した第一次大戦の緊張状態によって，一時的にではあるが，ようやく回避し得たのである。

社会的高揚は，1910年代の文学運動の中に深く反映された。反動の時代に文学を呑みこんだデカダン的諸傾向の濁流は，新しい，健康な潮流の前に道を譲り始めた。ロシヤ文学の中に現われた新しい潮流を，ボリシェヴィキーの機関紙『プラウダ』は，«リアリズムの復興»と性格づけ，ア・トルストイ，トレニョーフ，シシコフ，チャプイギンその他，現実の中に生きた真実を追求する新人群の登場を歓迎して，つぎのように評した，――「彼らは，その作品の中で，«お伽噺的な遠い彼方»ではなく，神秘的な«タヒチ人»ではなく，――真実のロシヤ生活を，その恐怖のすべて，その到るところに存在する月並みさのすべてを含めて，描き出している。」「デカダン派の諸氏が蘇ったリアリズムに反対して闘うのは，この中に労働運動の力の反映が感じられるからにほかならない。彼らは，自分たちの俗悪な«創作伝説»が，プロレタリアートによって創り出される生活の前に光彩を失って，消え失せてしまうことを感じ取っているのだ。[5]」時代の緊急の課題に鋭敏に反応した，若いリアリスト作家たちにとって，大きな精神的支柱となり，導きの星となったのはゴーリキイの存在であった。

1906年から1913年の末まで，ゴーリキイは国外亡命を余儀なくされていた。長編『母』の出版に関連してペテルブルク地方裁判所から出されていた逮捕状と宿痾の肺患進行が，ゴーリキイの帰国を妨げていた。しかし，国外にあってもゴーリキイは，以前と同様，ロシヤ文学の進歩的傾向の事実上の指導者としての活動を展開しつづけていた。カプリ島の彼のもとに送られる，«民衆出身の作家たち»の大量の原稿を通読して，これに適切な助言を

(4) В. И. Ленин, Сочинения, т. 1, с. 282.
(5) «Путь правды», № 5, 26 января 1914 г.

与えつつ，ゴーリキイは新しい文学勢力の組織者として，社会評論家として，そして何よりもまず，注目すべき芸術家＝作家として精力的に活動を進めていた。

ゴーリキイの作家的成長にとって，カプリ時代はきわめて重要な意義をもつ。その初期においては，たとえ一時的・表面的であったにせよ，革命挫折ののちロシヤ社会を覆った沈滞の現象は作家を深く憂慮させ，その重苦しさは，作家の周囲に波紋をかき立てる革命党の内部抗争によって拍車をかけられた。ゴーリキイは，沈滞と頽廃からロシヤが脱出する道を，《建神主義》への熱中に見いだそうとした。その苦しい探求を端的に示しているのは長編『懺悔』(1908年) であった。発表当時，賛否両極端の騒々しい論評によって迎えられたこの作品について，こまかな分析に立ち入ることは他の機会に譲らなければならないが，新しい生活創造の課題を農民の伝統的生活理念，とくにその宗教的理想と気分において解決しようとする試みにおいて，それは『母』の作者の現実追求として一歩後退と見なければならないが，同時に，それは，試行錯誤を通じて，作家の眼が民衆の精神生活の深奥部にひそむ諸矛盾に深く透徹したことによって，つぎの時期に展開される人民像創造のための重要な契機をゴーリキイの中に用意したということを指摘しておこう。『懺悔』のあと，ゴーリキイは厳しいリアリストとして，ふたたび広汎な生活諸相をとらえ，戯曲『最後の人びと』(1908年) には警察的支配の代表者たちの形象を通してツァーリズム体制崩壊の宿命性をあばき，戯曲『ヴァッサ・ジェレズノーヴァ』(1910年) においては資本の論理の反人間性とブルジョワジーの腐敗のプロセスを明らかにし，中編『オクロフ町』(1909年)，『マトヴェイ・コジェミャーキンの生涯』(1910～1911年) においては，《ロシヤ的沈滞の地方の巣窟》として小市民世界の実態，その社会心理と世界観を映し出した。カプリの最後の時期，作家の創作的関心は次第に自伝的系列へと集中されていった。自伝三部作，中編『主人』，短編『マカールの生涯の一事件』その他，さらに『人間の誕生』に始まる『ルーシをめぐり

て』の連作短編および回想的作品の多くがこの時期に執筆され，あるいは構想が立てられる。

1910年代，新しい高揚の時代に始められたゴーリキイの自伝的系列への集中的追求は，何を意味するのか。

1912年10月，ゴーリキイは『ルーシをめぐりて』の構想にふれながら，つぎのように書いた，――「私は一連のオーチェルキを計画しました……私は，それらによって，ロシヤ的心理の若干の特質と，私の理解するかぎりで，ロシヤ人のもっとも典型的な気分を線描してみたいのです。[6]」「……このタイプのオーチェルキの中に，私は，《ロシヤ生活》の――ロシヤ的心理のまさしく《根幹的な》あるものを描き出したいのです。そして，これらのオーチェルキに『ルーシ』という共通表題を与えようかという，不遜な企画をもちさえしたのです。[7]」

『ルーシをめぐりて』の諸短編に描かれるのは，作家の初期創作によって読者にはなじみ深い前世紀80～90年代初頭の世界である。しかし，このことは，《今日》の課題をゴーリキイが回避したという意味ではない。ゴーリキイは指摘した，――「ロシヤの誠実な人びとの前にかくも多くの，巨大な課題が据えられたときはかつてなかったし，未来への道を照らし出すために，過去のすぐれた描出がかくもきわめて現代的であるような時代はかつて存在しなかった。[8]」まさしく，ゴーリキイが自伝的世界を取り上げるのは，その中で一人の《私》の成長の過程を再現するためではなく，《屈辱の苦さ》を心に刻みつけて生きてきた，過去のゆたかな，あまりに強烈な印象にみちみちた素材の上に，現代の緊急の諸問題を解決する武器をさぐるためであり，歴史的事実から離れずに，今日的になお意義を失わないところの，過去の諸現象を再吟味し，人民生活の深奥部の中から未来の形成に有効な諸要

(6) «М. Горький. Материалы и исследования», изд. АН СССР, М.—Л., т. 1947, т. 1, с. 152.
(7) М. Горький, Соб. соч., т. 29, с. 251.
(8) «М. Горький. Материалы и исследования», т. 1. с. 298.

素を発見し，それらを統一的に結晶せしめようとするものであった。

まさしく，1905年の革命挫折の要因のひとつとして，非プロレタリヤ大衆のいちじるしい部分が革命において受動的な役割しか演じ得なかったという事実を無視することは出来ないであろう。この時点においては，人民の先進的部分と他の諸階層とはその意識において隔絶していた。そして，その後の数年間に，人民の意識は総体的には計りがたく成長したにもかかわらず，いぜん，古い生活慣習に呪縛された，膨大な階層が取り残されていたのである。これらの階層の動向こそが，ロシヤの解放運動の推移に深くかかわっていた。「ブルジョワジーとプロレタリアートは……ロシヤ史のこの《段階》において，《ナロート》にたいする，大衆にたいする影響に起因する闘争へと踏み入った[9]」のである。解放運動の高揚の時代に書かれた『ルーシをめぐりて』の諸短編の中に（他の自伝的作品におけると同様），社会的闘争からはまだはるかに遠く，その世界観において不安定な，ときには有害な偏見と観念に毒された人民層の描出に大きな場所が割かれてるのは偶然ではない。

歴史の活動舞台にまだおのれの姿を示すことを知らなかった，ロシヤの《ナロート》の精神的風貌とはいかなるものか。その創造的エネルギー，その積極的活動の能力はいかなるものか。そして彼の中で勝利を得るのは何か——理性か，偏見か。これらの問題の解明が，ゴーリキイにとって焦眉の課題となっていた。かつてゴーリキイは，論文『個性の崩壊』の中で，同時代の文学の頽廃を批判しつつ，ロシヤ古典文学の伝統を擁護して書いている，——「ロシヤではどの作家も真にするどく個性的であったが，彼らのすべてをひとつの希求が結びつけていた——それはこの国の将来を，この国の人民の運命を，地上におけるこの国の役割を理解し，感じ，推測したいという希求だ……　昔の作家は何を語り，教えたか？——力づよいロシヤ語をつくり出した自国の人民を信ぜよ，この人民の創造力を信ぜよ，ということだ。こ

(9) В. И. Ленин, Сочинения, т. 18, с. 352.

の人民が起ち上がることに力をかし，この人民に近づけ，この人民といっしょに進め，ということをだ。[10]」いま，ゴーリキイは，1910年代の歴史的状況の中で，ロシヤ文学の伝統的な，そしてもっとも今日的でもある国民的課題を，人民そのものの立場において解決しようとする。『幼年時代』の中の力づよい宣言が示しているように，作家は，ロシヤ生活の暗い混沌の中から明るい端緒が生まれつつあることを，「あらゆる家畜的な厭うべきものの」あぶらぎった層をうち破って，「鮮明な，健康な，創造的なもの」が成長しつつあることを，そして，結局は「光あふれる人間的な生活」を人民は再興するということを，深く確信していた。[11]

そして，それゆえに，『ルーシをめぐりて』の世界では，生活現実の苛酷な真実が明るい，ロマンチックな未来の展望と融け合い，オプチミスチックな生活肯定の見解が深刻なドラマチズムの内奥からほとばしり出る。しかし，ここではドラマチズムが作品の表面に現われるのはまれであり，物語の筋はきわめて簡潔で，事件らしい事件はほとんどの場合，直接的な描出の対象から除外され，わずかに登場人物の独白・回想・対話の中で伝えられるにすぎない。ドラマチズムは個々の事件の中に存在するのではなく，作家が描き出すところの人民の生活画面のうちに，主人公たちの心理と気分と思想のうちに内在するのである。

それは苦悩するルーシである。凶作の農村，泥濘と廃墟の貧民街，仕事とパンをもとめ，群をなして国の端から端まで放浪する農民……　放浪と貧窮とは健康な労働意欲を人間から奪い去る。打ちつづく不幸は，人びとを「疲弊した生国から引きはなし，秋風が枝葉を吹きまくるように」（『人間の誕生』，c. 9）遠い異境での流浪へと追いたてる。流浪のうちに彼らはかつての勤勉な農民から「やくざな連中」に変貌し，「仕事をもとめて」各地を歩き廻りながら，「働くということは，どうしようもなくなって――強請とか窃盗と

(10) М. Горький, Соб. соч., т. 24, с. 66, 67.
(11) М. Горький, Соб. соч., т. 13, с. 185.

いった，他の手段では口に糊するわけにはいかなくなって，ようやく始めるのである。」(『女』, c. 126)　しかし，もしも彼らのうちに労働への意欲と能力とが保持されていたとしても，事態に変わりはなかった。「好きなだけ働く人もいりゃ，まるっきり働かない人間もいる。わしらのところじゃ，力不相応に働くけれど，いいむくいはさっぱりありはしない……」(『故人』, c. 216)

極度に困難な生活条件は，人びとのうちなる人間的諸特質を磨滅させ，彼らをその物質的状態とひとしい精神的貧困へと追いつめ，人民生活の暗黒面を醸成する。『鳥の罪』,『谷間で』,『チームカ』,『チャングールにて』などの諸短編には，人民生活において日常茶飯事として繰り返される《黒いドラマ》が示し出される。飢えた狼のような，荒んだ心をもて余す人びとは，一瞬まえまで，あるいは打ちとけて語り合い，あるいは仲よくウォトカを酌み交しながら，ごく些細なことから牙をむき出し，罵り合い，しばしば殺人事件によって幕を閉じる暴行へとつっ走る。

そして，いっそう深刻に恐ろしいのは，表面に現われた粗暴さ，野蛮さではない。短編『見物人』を見てみよう，――軍楽隊の劉喨と響きわたるメロディにつつまれ，正装した兵士たちの行進の中で，ある将軍の葬儀がおこなわれる。灰色の，よどんだ日常に倦み疲れた町の人びとは，茅屋から，地下室から，屋根裏から這いずり出して，行進のおこなわれる通りへ集まってくる。人混みに驚いて，護衛の憲兵の馬が暴れ出し，人垣をなぎ倒し，そして一人の孤児の足を蹄鉄で踏みつけてしまった。数日後，この怪我が原因で死んだ孤児を運んで，こわれかけた二輪馬車が墓場へ向かう。付き添うのは馭者と巡査が一人だけ……　だが，この短編において，孤児コーシカ・クリュチャリョーフの薄幸の短い生涯にもまして真に戦慄的に恐ろしいのは，彼にたいするプリャジーリナヤ通りの住民たちの態度である。コーシカの雇主である製本屋のグーシコフは，皮革を購入するために少年に渡しておいた金を取り戻すと，「足がなけりゃ，てめえなんかに用はねえんだぞ」と言い残して，見物の人垣の中に消えてしまう。他の人びとは少年の苦悶をおもしろそ

うに眺めるだけで，彼を助けようと手を差し延べることはしない。やがて見物に堪能すると，何ごともなかったように，安らかな表情で，少年を路傍に放置したまま自分の家へと散ってゆく。まさしく彼らにとっては，「世界中の出来ごとはすべて自分たちの見世物にすぎない」(c. 323) のであり，その価値規準は「おもしろいか，おもしろくないか」にある。葬式一般，とくに貧乏人のそれは，うんざりするほど見慣れているし，自分の貧乏を見せつけられるようなものだ。だが将軍の葬式とあれば，豪華で，にぎにぎしく，それはおもしろい。そして，憲兵の馬が暴れだして，一人の女が驚いて顚倒し，眼をまわすと，それは人びとの笑いを誘いだすほどにおもしろい。しかし，そのおもしろさは，蹄鉄に踏みくだかれて血を噴く少年の足という，おもしろい《見世物》には比較すべくもない。「血というものは，たえまなき見物衆のことさら緊張した注意を惹きつけるだけの特質を有していた。彼らはいつも，特別の貪欲さで，ことばもなく血を眺めるのだ——これもまた，この人びとの昔からの強烈な嗜好なのだ。」(c. 323) 人びとは，葬式の行進も，失神した女のことも忘れて，少年のまわりに集まる。しかし少年の身にそれ以上のおもしろい結果が期待できないと知ると，人びとは少年を見限ってしまう。悲劇の結末として孤児が墓地へ運ばれるとき，それは人びとにとって《見世物》にも値しない，ごく有りふれた，粗末な，おもしろみのない日常茶飯事でしかない。プリャジーリナヤの住民における《見物人》気質——これは，小市民世界の動物的エゴイズム，その社会的無関心と受動性の典型である。

『ルーシをめぐりて』の諸短編において，ゴーリキイは，ロシヤ社会に瀰漫する小市民的思想——《мещанство》をとりわけ鋭く摘発する。《мещанство》——それは，もともと都市住民の小所有者階層，小商人，零細手工業者，職人，下級勤務員などから成る階層にたいする身分呼称であったが，この階層の性格であるところの，社会的視野の狭小さ，経済的不安定，打算的生活感覚によって小市民性・俗物根性の意味で使われるようになった。ゴー

リキイは，«мещанство» の本質の中に，人類の進歩，社会の発達を妨げる反動的イデオロギーの源泉を見ていた。かつて彼は，論文『小市民層についての覚書』の中で，«мещанство» を「支配的な諸階級の現代の代表者たちの精神の構成」であると指摘して，資本主義制度の社会においてはそれが一つの階層だけでなく，この制度に立脚するすべての階級をつらぬく思想であることを暴露し，その基本的特徴として，「奇形的にまで発達した所有の感情，自己の内外の平安にたいする張りつめた欲望，この平安を乱すおそれのあるすべてのものにたいする暗い恐怖心[12]」をまず第一に挙げている。国中に生活の悲惨が黒い海となって氾濫するとき，ロシヤの教養社会は何をしているのか。ゴーリキイは問いかける。短編『シャーモフ邸の夕べ』には，知識人たちが，民衆の苦悩とはかかわりなく，民衆の血と汗の犠牲の上に，安閑と優雅な «知的» 娯楽にうち興じ，短編『スホミャートキン邸の夕べ』では，飽食と無為によって時間をもて余す実業家たちが，一手習いおぼえるために一万ルーブリを投じたという手品遊びにうつつを抜かしている。«平安への欲望» は民衆の中の «物知り»——アンチーパ・ヴォロゴーノフ（『ニールシカ』）とイラークリイ・ヴィルボフ（『墓地』）が説教する恭順と受動性のイデオロギーとなり，最下層に生きる人びとの «哲学»——「おれはおまえから何も望みやしない。おまえもおれから何も求めるな」（『カリーニン』）という，人民連帯の否定のプロパガンダとなるのである。

だが，『ルーシをめぐりて』の世界の基本的思想潮流は，生活のこれら暗い側面によってのみ現わされているのではない。作家の課題は，第一義的に，人民が所有する尽くることのない力をその源泉において示し出すことであった。この世界の本当の主人公たちは，豊かな精神的資質を本来的に所有する人民階層の中の人びとである。生活の現実の諸条件のもとではその資質は，当然のごとく，その発達が妨げられ，曇らされ，ときには歪められていた。多くの場合，それは，矛盾し，複雑な，作家が好んで言ったように，

(12) М. Горький, Соб. соч., т. 23, с. 341.

«まだらな»（пестрый）個性である。しかし，これらの形象の中には，大なり小なり，人民の巨大な創造的可能性についての思考が含められている。

不幸な，虐げられたオルロフの百姓女は，母となる偉大な瞬間の苦痛の中を通過することによって，驚くべき変貌をとげた。彼女の全身から発する精神的輝きは，以前にはその存在の片鱗さえも予測しがたかったものである。『人間の誕生』という，誇らかな，壮大な，格調高い響きをもつ題名は，文字どおりの意味ばかりではなく，母親自身のあたかも精神的再生を，その秘められた内奥の資質の発現をも意味するものとして，この小さい短編に与えられているのだ。「こずるくて，おしゃべりの」料理女ウスチーニヤと，「やせて，色黒で，びっくりしたように動かない眼をもった娘」である小間使のマリヤは，夏の夕暮れの休息のひととき，すばらしく美しい歌を作って，深い感動を体験した。灰色の日常の，あくせくした家事労働に追い廻されてはいても，彼女たちの中で，ロシヤ民族の生命力のあらわれでもあるところの，あの力づよく，優しく，潤いのある民謡の調べを生み出す才能の泉は涸れることがない（『歌はいかに作られたか』）。腐敗物の臭気がただよう，穴蔵のような地下室に住む«鼻かけ»の麻紐作りの女，マーシカと，その息子の，小児麻痺で足の動かないレーニカは，悲惨な境遇の中にあって，閃光を発する人間的資質の輝き――思いやりを，いたわりを，生命の尊重を，良きものへの憧憬を失うことがない（『ストラースチ・モルダースチ』）。

これらの人びとの非凡な，秘められた可能性に実現の場が与えられないとすれば，それは環境世界に罪があろう。この世界の人びとが自分の最良の人間品性をまごうことのない実在として発揮するのは，異常な，非日常的な状況，環境の現実の束縛から内的に解放されるモメントにおいて，換言すれば，人間が自分を日常的諸関係から切りはなした状態においてである。反対に，日常的諸条件の中では，主人公たちの同じ資質が内的矛盾に，その否定的諸側面に覆われてしまうのである。

この意味において，短編『流氷』に登場する，大工組合のオーシプ親方の

形象は注目されなければならない。これは，『ルーシをめぐりて』の中でもっとも興味ぶかい，複雑な，《まだらな》主人公の一人である。物語を通して進行するオーシプの性格発展は，すぐにはとらえがたいところがある。優秀な技能をもっているが，組合で一番の怠け者でもある，ずるがしこい《百姓》(мужик) が，一定の状況のもとでは，誰にも知られなかった優れた品性を発揮することが出来るのである。自分と仲間の生命が危機にさらされたとき，オーシプ老人は，平素の怠け者から突如として《指導者》に変身し，事態にたいして平然と，果敢に対応し，有無を言わせぬ権威をもって仲間を導き，危機脱出の偉業をなしとげる。そして，氾濫する川を渡り終えたあとでは，周囲の人びとにとっては同じように不可解であるのだが，これまた突如として彼は自分の日常的状態に戻ってしまうのである。

オーシプの形象の性格描写，その外面的風貌の変化を通じて，ゴーリキイの作品において常に特徴的である主人公の内的発展がみごとに造型されている。短編の初めのほうで読者の前に提示される主人公は，得体の知れない，狡猾そうな老人であり，「こざっぱりした，均斉のとれた体つきの百姓で，バラ色の頬と，柔かい首のところで細かい輪形にキチンと撚ってある，銀色の，整った顎髭」があり，「青い，晴れやかな」，「矢車菊のような眼」と，「気持のいい，のべつしゃべりつづける」テノールの持ち主だ。彼にたいする労働者たちの態度はこうだ，――「彼はなんといっても《組合の》人間だ。しかし年寄り連中は彼を好かない，カラ骨やみの道化者とみなしていて，彼の評判はすこぶる悪い。若い連中のほうは，彼のおしゃべりを聞くのは好きなくせに，彼にたいしては，気にもとめないし，あまり信用もしないし，時々は意地の悪い眼を向けるのだ。」(c. 21) しかし，流氷が始まって，激流の中に孤立する橋杭のところに仲間といっしょに取り残されたとき，オーシプの風貌も，挙措もいっぺんに変わった，――「オーシプはなんだか少し若くなって，がっしりして見える。その赤ら顔のずるそうで愛想のいい表情が消えて，眼付きは少しくもり，厳しく，敏活に眺める。怠け者らしい，

よたよたした歩きぶりも消えてしまった――彼はしっかりした，確固たる足の運びをしていた。」(c. 29)「それはオーシプとは別人のように見えた，――顔はふしぎに若返って，見慣れたもののすべてがそこから拭い取られている。青い眼が灰色になって，背丈も半アルシンほど高くなったようだ……」(c. 32) 彼は人びとの先頭に立って，川を埋める流氷から流氷へと，岸に向かって飛び伝い，簡潔な，適切な，力づよい命令をつぎつぎと発する。しかし，川岸に到着して危機が解消してしまうと，オーシプは，彼の偉業を《無鉄砲》として，《人騒がせ》として非難する人びとの前で，哀れな老人の役割に戻って，顔に皺を寄せ，罪人のように眼を伏せ，しゃがれ声で弁解する，――「へえ，旦那，わしがみんなの発頭人でごぜえまして……大祭日のことでごぜえますし，ご勘弁を，旦那……」(c. 38)

『流氷』は，コロレンコの傑作短編の一つ，『河は戯れる』と内容的に独特の創作的呼応関係をもつものである。1913年7月，ゴーリキイは，『流氷』を含む作品集『遍歴者の手記』第一部をコロレンコに送って，つぎのように書いた，――「……『遍歴者』は――短編『河は戯れる』の中から出たあなたの言葉です，――これは私の愛する短編です。私の思うに，それは《ロシヤの魂》――一年働いて，十年間泥濘とありとあらゆる混沌の中で休息するところの，あの人びとの理解において私を非常に助けてくれました。人の話では，私が労働者たちに，ロシヤ史におけるチューリンの役割をテーマとした講義をかなり成功的におこなったそうです，――私のもとでは，ミニーンも，ボロトニコフも，プガチョーフも――すべてチューリンたちだ，ということになったのです！　どうしたらいいのでしょう？　《事実が法則から出るのではなく，法則が事実から出てくる》というわけです。」[13] ゴーリキイがコロレンコの短編の中でとくに高く評価したのは，主人公チューリンの形象において展開された，平素には深く隠されていて，表面に現われることのな

(13) «А.М. Горький и В.Г. Короленко /Переписка, статьи, высказывания/», Гослитиздат, М., 1957, с. 69–70.

い，ロシヤ民衆の巨人のごとき偉大な可能性の主題である。オーシプの場合と同じように，ものうげな，怠惰な，酔いどれのチューリンの中から，川の氾濫のとき，男らしい決断力，理性的エネルギー，合目的の行動力がほとばしり出る。そして，これらの人間的資質の栄光は危険が去るとともに，チューリンの外貌からは消え去ってしまうのである。

しかし，主題とモチーヴの共通性にもかかわらず，ゴーリキイにあっては多くの点で別の意義が付与されている。とくに重要なことは，コロレンコの短編においては取り上げられなかった現実の諸矛盾への解明を，ゴーリキイが追求していることである。オーシプの狡猾さは，彼の罪ではなく，彼の不幸である。彼が生きなければならない所有者の掟が支配する世界，人間と人間の関係に，「赤裸々な利害以外の，つめたい《現金勘定》以外のどんなきずなも残さない[14]」ものに変わった世界の雰囲気の中で，彼がどうして卒直に，誠実に，ためらいなく行動することが出来よう。大工組合の親方であると同時に，自分の雇主の下僕である彼は，かつて仲間の一人が評したように，「おまえの中じゃ働く人間はくたばったが，主人は生まれなかった……だから，おまえは，糸に吊るされて忘れられた錘みたいに，一生隅っこでぶらついてりゃいいんだ」(c. 21) という位置に置かれ，たえず仮面をつけて，真実の自分の素顔を覆っていなければならない。このような彼の状況がつぎのような処生訓を彼の中に形づくる，――「何をしようと，どんなに走り廻ろうと，いいかい，ずるさがなけりゃ，嘘がなきゃ――どうしたって生きて行かれやしねえ，そういった生活（くらし）さ，世渡りとはそういったものなんだ，こいつを肝に銘じておきな……てめえが山に登ろうとすると，悪魔が足を引っ張るというわけさ……」(c. 39) これは，危険な渡河作戦の豪胆な指揮者であり得た人間にとって，もっともふさわしくない思想に見えよう。しかし彼は，不正が支配する愚劣な現実に力いっぱい挑戦し，一瞬の火花を散らし，

(14) マルクス，エンゲルス著，大内・向坂訳『共産党宣言』，岩波書店，42ページ。

現実生活のよごれに染まるいとまもなしに死をいそぐ貴族文学の主人公ではない。彼の課題は，《ひとときのヒロイズム》の激発にあるのではなく，生きぬくということ，そのこと自体にあるのだ。傲然と大空を仰いでそそり立ち，枝を高く張り出す樫の大樹のようにではなく，大樹を吹き倒す暴風の下に身を伏せて，大地に固くしがみつく雑草のように，いかに苛酷な条件の中においても生きつづけてきたし，生きなければならない民衆の生の課題である。この課題の遂行を貫徹するために必要なときにのみ，彼は自分の素顔を明らかにする。そして，その必要がすでに去ってしまうと，彼はふたたび仮装の《自己》に帰って，生きつづけるのである。しかし，それならば，オーシプは，民衆は，みずから環境の変革へと起ち上がることはないのか。短編の結末で，オーシプが語る言葉は，この問題の解明にとって深い暗示に富むものに思われる。彼は溜息をつきながら，言うのである，――「人間の魂にゃ翼があるだよ，夢の中で飛ぶだよ……」(c. 40)

人間の魂が夢ではない現実に飛翔を――一瞬ののち急転直下の墜落に終わるそれではなく，「前へ，より高く，たえず前へ，そして，より高く」飛びつづける飛翔を――始めるのは，どのような条件のもとにおいて成就されるか。ゴーリキイの本来の課題はここから始まる。ゴーリキイは，あたかも現在の被覆を引き裂き，その裂け目の中から，今日の現実の諸矛盾を透して未来の人間を見ようとするのである。

『ルーシをめぐりて』の世界における未来の主題は，連作の諸短編の他の登場人物のグループにおいていっそう強く，明確に追求される。これらの人びとの性格と運命は多様である。しかし，これらの人びとを結びつける共通の要素がある。それは，人間の労働の偉大な価値の理解という土壌の上に芽生える新しい世界観の萌芽であり，現存する人間関係への不同意であり，別の原理の上に生活を再建したいと願う自然発生的な希求である。

そうした新しい生活の探求者の一人が，短編『女』のタチヤーナである。彼女は，ゴーリキイの初期短編のマーリヴァを彷彿とさせ，その後身とも思

えるような，美しい，たくましい，誇り高い女浮浪人である。しかし，彼女はすでに，かつてマーリヴァを魅了していた，あの浮浪人的《自由》に満足することは出来ない。家もなく身寄りもなく，ひとり，ルーシの地をさまよいながら，彼女は祈りに似た思いでひとつの夢を育んでいる——未開の原野をひらいて，新しい生活，新しい農村をつくりたいという夢だ。その夢が実現されるためには，《しっかりした百姓》を伴侶として得さえすれば良いのだ，と考えるタチヤーナは，たしかに，あまりに粗朴すぎるであろう。しかし，この未熟な観念の背後にはるかに大きな，はるかに深い何かが感じられはしないだろうか。人間関係の新しいあり方についての渇望，根本的に生活を改造したいという倦むことのない希求，かぎりない人間への愛が燃えたぎっていないだろうか。「大きな悲しみの中では小さい喜びも大きいものだ……」(c. 151) と，タチヤーナは語る。この言葉は人びとの心から心へとこだまするのである。

『ルーシをめぐりて』の世界の人びと——タチヤーナや，《忍耐》の教義に抗議するヴァシーリイ・シランチェフ（『谷間で』）や，女商人のみせかけの愛の犠牲者グービン（『グービン』）その他の人びとは，一見したところでは，作家の初期創作の主人公たち——コノヴァーロフ，エメリヤン・ピリャーイ，マーリヴァなどのタイプの浮浪人，《引き裂かされた》人びとにきわめて近似している。しかし，この近似性はまったく外面的である。ゴーリキイの初期の《引き裂かされた》人びとは，所有者的生活機構を燃えるような敵意をこめて憎悪した——このことの中に彼らの力が存在した。しかし，彼らは環境世界を否定するのみで，何らの確信もなければ，アナーキスチックな自分の個性のほかに，何ら現実に対置すべきものを持ち得ない。これに対して，『ルーシをめぐりて』の主人公たちの中には，たとえまだ明瞭な形をとらず，ときには無意識的であるにせよ，人間の生活を支える創造的労働に裏打ちされた積極的ヒューマニズムの理念が生き，育っている。彼らの現実否定は，浮浪人的な生活蔑視に基因するのではなく，人間と生活を愛し尊重

するゆえに現実の不合理な生活関係を是正しようとする創造的否定なのである。彼らの意識も，力も，いましばらくは未熟で，ばらばらで，統一へと向かう道は嶮しい。しかし，短編『彼らは行く……』における，汽船で故郷に向かう百姓たちの力づよい声――「全ロシヤをおれたちは養ってやるんだ！」(c. 210) という言葉は，すでに始まった歴史的胎動に呼応する民衆の底知れぬエネルギーの激発を予測させるものである。

ゴーリキイは，1910年代の新しい社会的高揚という状況の中で，すでに90年代において描いた同じ現実をふたたび取り上げ，新しい時代の諸課題の解明という視点からこれを注視し，人民生活の中に，以前にたしかめたものよりもはるかに大きな，積極的な諸要素を発見し，人民の創造的可能性を示し出すことに成功した。これらの問題は，『ルーシをめぐりて』全編に語り手として登場する自伝的主人公の形象において，いっそう明確に示し出される。かつて初期創作の語り手は，人民生活の探求の中から，大文字で書かれる人間の概念を構成することが出来た。[15] いま，ゴーリキイの新しい語り手は，現実から何を引き出し，いかなる理念を構築するのか。

次回においては，語り手の形象を中心に検討しなければならない。

---

(15) 「ゴーリキイの初期創作における語り手の形象について」，『人文研究』，第32輯。